

あの頃、思い出の現場

サハリンⅡプロジェクト・OET土木建設工事

東亜建設工業株式会社 国際事業部工事部長 石井 誠一郎氏

良好な人間関係をどう構築するのか

極寒の地であるロシア・サハリン(樺太)に赴任したのは2004年3月のこと。「それまでシンガポールで仕事をしていたので、気温差が50℃ぐらいありました」。

新たに携わった事業はサハリンⅡプロジェクト。サハリン島の北東部で石油・天然ガスなどを採掘し、それを南部のアニワ湾まで約800kmのパイプラインで運んで精製する事業。ロイヤル・ダッチ・シェル(オランダ)、三井物産、三菱商

事、ガスプロム(ロシア)が共同出資する「サハリンエナジー・インベストメント」が事業主体となり、日本の千代田化工建設・東洋エンジニアリング・ロシア企業2社の企業連合(CTSD)が天然ガス液化(LNG)プラントの設計・調達・建設(EPCC契約)を担当した。

東亜建設工業はCTSDからLNGの積み出し棧橋建設工事、OET(オイル・エクスポート・ターミナル)土木建設工事、コンクリー

ト生産・支給工事の3件を受注。このうちのOET土木建設工事の所長として現地に乗り込んだ。

「何もない原野の中から建設を進めていくのを海外ではグラスファイールド」というが、ここはまさにそういう現場。工事開始後、数カ月経って現場に赴任したが、この時はすでに多くの問題を抱えていた」

その一つが下請けのロシアの建設会社との関係。「旧社会主義国と民主主義国ではワーカーに対する文化の違いがある。すでに元下請関係は最悪な状況で、お互いに不信感が芽生えていた。まずはその解消から始めた」。部下に下請企業を変えないことを宣言した上で、自ら下請企業の会合に参加し、対話を心がけ信頼関係を築いていった。

次に手を打ったのが使用骨材の確保。「計画では現場で掘削した土や石、砂を一部使う計画となっていたが、地盤が悪く、足りなくなる

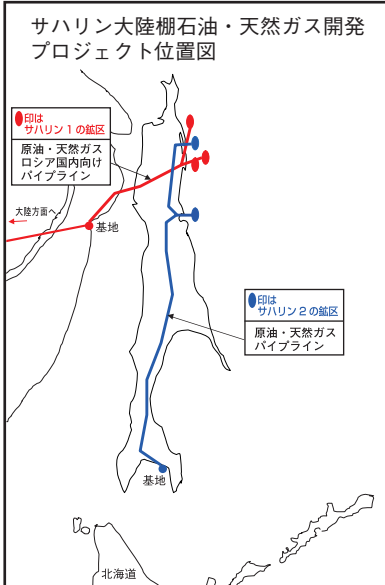
と思った。そこで地元の人材屋らと連携して採掘許可を取った」。これが奏功し、骨材の確保は円滑にできたという。

工事が軌道に乗り始めてからは、採算性の確保に頭を悩ませた。海外工事ではHSE(ヘルス・

セーフティ・エンパイロメント)、品質、工程という課題に加え、採算性の問題が必ずつきまとう。「利益確保に明確な答えはないが、その一つは発注者やコンサルタント、取引業者らと、良好な人間関係を構築できるかどうかだ。これには語学力など関係ない。相手のふところから飛び込んでいけるかが大切になる。その意味でこの現場は、さまざまな厳しい課題も多かったが、周囲の人たちと良い人間関係ができた

と「思っている」。

LNGプラントは当初計画よりもかなり遅れたものの、2009年2月に無事完成。そのプラント基地から日本や韓国などに出荷されている。



【上地図】サハリンⅡの推定可採埋蔵量は石油約1.03億トン、天然ガス約5000億m³。サハリンには3～6のプロジェクトが計画されている。
【右写真】LNGプラントは不凍港であるアニワ湾に建設された。写真提供：SEIC

石井 誠一郎氏

1980年に東亜建設工業入社。95年インドネシア・パイトン火力発電所建設工事副所長、00年国際事業部工事部プロジェクト室長、04年サハリン工事事務所副所長、08年から現職。東工大卒、ワシントン大修士取得。東京都出身。55歳。